バカとけいおん！と召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとけいおん！と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ４０５０Ｚ

【作者名】
直井刹那

【あらすじ】
バカテスの文月学園にけいおん！のメンバーたちが入ってきて、オリ主や明久たちバカテスキャラと軽音部で学園生活を過ごしていく物語です。

この物語の設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。
また『けいおん！』とのクロスものです
オリ主が幼馴染の明久ともう１人の幼馴染と
秀吉、雄二、ムッリーニ等のＦクラスメンバーやＡクラスメンバーと
そしてけいおん！の唯・澪・律・紬や憂・和・梓たちと
楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。
バカテスとけいおん！の話を混ぜながらの話になります。
また、この物語は明久たちが入学してからの物語になります。
１年次はけいおん！メインの物語で、
２年次からバカテスメインにしていきたいと思っています。

物語設定？

この物語は『バカとテストと召喚獣』と
『けいおん！』のクロスものです

設定
・オリ主が明久たちバカテスメンバーと
けいおん！メンバーと文月学園にて日々を送っていきます。
・明久はもちろんの事、観察処分者です。
・オリ主と明久が軽音部に入部します。

原作との変更点
・明久は姫路に恋心を抱いていない
・開始が2年時ではなく1年時からになってます。
なのでオリ話になる可能性があります。
・また、1年時はけいおん！メインでいき、
2年時からバカテスメインになります。

また書いているうちに変更する場合があります。
それでも良い方は呼んで頂けると嬉しいです

プロローグ　天然さんとの出会い

まだ肌寒い3月。俺達はとある高校に向かって歩いてた。

智也「……」

陽一「ハァ…」

智也「……」

陽一「ふぅ…」

明久「……」

陽一「ああぁ…」

智也「…おい」

陽一「…なに？」

智也「さっきからうるさいんだけど」

俺は隣りを歩く俺の悪友である『春原陽一』に向かって言う。

陽一「しかたねェじゃん！！緊張してんだから！！
心臓が破裂しそうな勢いなんだよ！！
だから緊張してんだよ！ビビってんだよ！」

智也「…落ち着けよ。日本語がおかしいぞ。

あと急にテンションあげんな…かなりウザいから」

陽一「ウザいとか言うなよ！傷つくだろ！！
……はぁ。つうか、なんでお前そんなに落ち着いてんの？
今日が何の日か分かってるのか？」

明久「高校の合格発表の日だよね」

そう。今日は文月学園の合格発表の日だ。

陽一「そうだよ！なのにアナタたちはそんなに落ち着いてるんですか！？
フツー緊張するもんでしょうが！！」

智也「俺はお前と違って受かる自信あるしな。
それに明久を見てみろコイツだって落ち着いてるだろうが」

陽一「うわッ！ウゼェ！ってなんで明久も落ち着いてるんだ？
明久だってあまり成績良くないだろ？こっち側でしょうが！？」

明久「まぁそうだけど…ここまできたら腹くくるしかないしね」

智也「明久だってこうなんだぞ。ほら、さっさっと行くぞ」

陽一「ハァ。あいよ…」

今日は俺達が受験した高校の合格発表の日だ。
多くの中学生達が歓喜に湧いたり、悲しみに涙する日である。
だから普通は陽一のように緊張するんだろうが、（コイツの場合は

異常だが…）
俺は普通に合格できる範囲だったし、
試験も解けたから大丈夫という自信がある。
そんなことを考えてたら高校に着いた。
陽一「やべ～着いちまったよ。ヤバいよ？マジヤバいよ！！」
智也「何がヤバいんだ。いいかげんハラくくれバカ」
明久「そうだよ。それに大丈夫だよ。
　僕達智也に教えてもらったんだから大丈夫だよ」
今回の受験のために明久と陽一は智也に勉強を教えてもらっていた。
自慢じゃないが中学の時は成績は上位だったからな。

流石に合格発表の日とあって学生が多い。
おそらく合格したんだろう、友達同士抱き合って喜んでいる者、
嬉し涙を流している者、ケータイで笑顔で
電話している者などがそこにはいた。
陽一「なぁ智也君お願いがあるんだけど…」
智也「……なんだよ？気持ち悪いな」
陽一「俺の代わりに合否を見てきてくれッ！」
智也「はぁ？何でだよ？自分で見ろよ」

陽一「極度の緊張により足が動きません…」

智也「お前どんだけビビってんだよ
　……バカなこと言ってないで行くぞ、明久手伝え」

明久「うん」

ガシッ！×2

ズリズリ…

陽一「ちょっ！？やめ、離せ！」

バカなことを言っているアホの襟首を掴んで無理矢理、
合格発表が行われている掲示板に引きずっていく。

パッ

ドゴォ！

陽一「うげッ！！」

掲示板に着いたので今まで引きずっていた陽一（バカ）を離す。

陽一「何すんだテメェ！！イテェじゃねェか！！」

智也「うるせェな。わざとだ。それにここまで運んでやったんだ、
　感謝されこそすれ恨まれる筋合いはねェぞ」

となりでまだギャーギャー言ってるバカを放って俺は掲示板を覗く。

智也「さて俺の番号はっと…」

俺の番号は１６７番だ

智也「おっ　あったあった」

掲示板には俺の番号が書かれてあった。

智也「やっぱ受かってたな」

俺が思っていた通り、見事に合格していた。

智也「…で？お前らはどうだったんだ？」

明久「と、智也！僕も受かってたよ！！」

智也「お、良かったな明久」

明久「智也が勉強教えてくれたおかげだよ」

智也「で、陽一は？」

陽一「…まだ見てない…」

智也「早くしろよ」

陽一「…怖いっす…」

智也「このビビりめ…」

陽一「頼むよ？一生のお願いだッ！俺の変わりに見てくれ！！」

智也「……こんなので一生の願いなんてするなよ。
まぁ土下座でもしたら見てやってもー…」

俺は悪ふざけでそういうと

ガバッ

陽一「お願いします」

その場で土下座するアホ。
こいつにはプライドはないのか…

明久「・・・本当に土下座してるよ」

智也「本当にするなよ……わかった…見るから、土下座やめろ
俺たちがハズかしいから」

陽一「サンキュー…流石、俺の親友だ――――」

智也「そんな風に思ってんのお前だけだから」

明久「だね」

陽一「…ひどッ！！」

さて、コイツは受かってんのかね…

陽一の番号を探す…確か番号は１５９番だな。

番号を探す…

……

ポンッ

智也「…陽一」

陽一の肩に手を置き、神妙な顔で俺は告げる。

陽一「ど、どうだった…？」

明久「智也、どうだったの？」

智也「……あのな…非常に言いづらいんだが……お前は…」

陽一「…な、なに…？」

明久「え？」

智也「…残念ながら……受かってたぞ……」

陽一「…そっかぁ…ダメだったか…まぁ仕方がないよな……これも運命……って受かってんのかよ！！！！」

智也「おおー見事なノリツッコミだな。さすが陽一（バカ）だ」

陽一「なんでそんな紛らわしいことすんだよッ！！！てゆうか『残念ながら』っなんだ！！」

智也「そんなの決まってるだろ。面白いからしかないだろ！それに残念なのは俺だ。またお前と一緒なんだから」

陽一「お前最低だな！！」

智也「まぁ落ち着け。良かったじゃねェか無事合格出来て」

陽一「ぐッ…まぁね…そっか合格したんだ俺……良かった……良かったよ！智也くん！！」

明久「良かったね陽一」

バッ！

急にバカが俺に抱き付こうとしたので俺は…

ドゴォ！！！！

陽一「ぶバァ！！！」

渾身の回し蹴りを放ってやった。

陽一「イテェじゃねーか！」

智也「気持ちわりィ事してんじゃねェよ……アホが」

男に抱き付かれる趣味はねェ。

さて、そろそろ退散するか。

何やら今の一件で目立ってしまったようだ。

俺が騒いでいるバカを置いて帰ろうとすると、

後ろから突然声を掛けられた。

唯「あの、すいません！け、結果発表、一緒に見てくれませんか！？」

振り返ると、若干癖毛気味の少女がいた。

智也「……はぁ？何で？」

唯「じ、実は・・・一緒に来てくれるはずの友達が風邪で
　来れなくなって妹も用事で来れなくなっちゃったんです・・・。
」

少女は暗い顔でそういう。

智也「そうか……分かった。

一緒に見てやるからそんな顔すんなって」
さすがにそんな顔されたら断りにくいしな。
唯「ほ、ほんとですか！？」
智也「あぁ。ほんとだ」
陽一「ねぇ僕の時と対応違わない？」
智也「気のせいだ」
明久「気にせいだよ」
陽一「いや、気のせいじゃ―うべっ」
俺は陽一を黙らせて（腹を殴り気絶させて）
智也「じゃあ、ちょっと一緒に見てくるから
明久この陽一（バカ）のこと頼むわ」
明久「わかった。じゃあ陽一連れて先に帰るね」
智也「悪いな。じゃあまたな」
明久「うん、じゃあね」
俺はそういうと癖毛気味の少女のところへ向かう。
陽一は明久に頼みつれて帰ってもらうことした。
居ても皆さんの邪魔にしかならないからな。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

智也「ほら、せーので見るからな」

唯&智也「「せーの！」」

自分の番号でもないのに一瞬、ドキッとする。

唯「あ、あった！やったー！！！
　あ、そうだ。自己紹介遅れました！
　私、平沢唯です。唯って呼んでください！」

智也「俺は中川智也だ。よろしくな平沢」

さすがに初対面の人間を名前で呼ぶのはな………

唯「トモ君だね！！！」

アレェ？いきなり下の名前で？しかももうあだ名かよ。
ちょっとハズかしいんだけど……

そこへ１人の女の子が駆け寄ってくるのが見えた。

憂「お姉ちゃん！」

唯「あ、憂だ～！」

智也「……妹さんか？」

憂「用事早く済んだんだ。お姉ちゃん、この人は？」

唯「あ、紹介するね。掲示板一緒に見てくれたトモ君だよ！」

憂「お姉ちゃんがお世話になりました。トモさん」

智也「いや、別に俺は何もしていないよ。
　それと俺の名前は中川智也っていうんだ。よろしく」

憂「あ、失礼しました。智也さん。よろしくお願いします。
　お姉ちゃん、あだ名付けるのが好きなんです！」

そうなのか？
ハズかしいからやめてほしいんだが

唯「トモ君、メアド交換しようよ！」

智也「トモ君はやめろ。ハズかしいから。まぁメアド交換はかまわないが」

唯「えぇ～。可愛いのに」

可愛いってあまりうれしくないな……。

憂「私もいいですか？」

メアド送信&受信完了。

憂「あの～、よろしければ智也さんも一緒に夕飯どうですか？
　といっても、レストランなんですけど・・・。」

唯「とってもおいしいんだよ！一押しなんだよ！」

う～ん、どうするかな。

でも、何かアレだな。

さすがにそれは気まずいな・・・。

智也「・・・遠慮しとくよ。家族でごゆっくり・・・」

唯「えぇぇ～～！！！」

俺が断ろうとすると平沢姉が声をあげる。

憂「お姉ちゃん、無理言ったらだめよ」

妹は必死に姉を宥めている。余計、断り辛い・・・。

智也「わ、わかった。目線痛いから、そんな顔するな！」

憂「え？良いんですか？智也さんはご家族とは予定ないんですか？」

智也「あぁ両親は海外で仕事してて俺、１人暮らしなんだ。

だから別にかまわないんだが良いのか俺なんかがお邪魔して」

さすがに今さっき知り合った人間が
いきなりご家族と食事なんて少し気まずいからな。

憂「それは大丈夫ですよ」

～平沢家一押しのレストラン～

平沢・父「智也君も大変だね」

智也「い、いえ・・・でももう慣れてましたから」

憂「あ、お姉ちゃん！口にソースが・・・。」

唯「え、どこどこ？」

憂「動かないでお姉ちゃん！」

唯「ありがと、憂～♪」

本当にできた妹さんだな。

結局、俺は平沢姉妹と一緒に食事に行く事になり、ご馳走にまでなった。

キャラ紹介（1）

中川智也（なかがわともや）

性別：男

誕生日：9月10日（乙女座）

身長：182cm

得意教科：英語・数学

苦手教科：古典

趣味：読書・ゲーム・バスケ・音楽鑑賞・演奏（ギターやベース）

特技：料理（明久にはかなわない）・ギターとベース・バスケ

外見：見た目はクラナドの岡崎朋也で、髪の色・目の色は黒、左眉に切傷痕があるので見た目はヤンキー。

性格：中身は家庭的で、女心にも疎い朴念仁。だが、変な所で鋭い。

また、温厚で面倒見も良く陽気な性格であり友達思い。そして負けず嫌い。

・運動神経がよく、中学時代はバスケ部の部長だった。

・運動神経がいいため雄二並の武力を持つ。

また、成績も優秀で中学時代では常に上位をキープしていた。よって文武両道。

・明久と陽一とは幼稚園からの付き合い。

・食べる事が好きで鞄の中にお菓子を常備している。

だが、味覚はお子様で酸っぱい物やワサビが苦手。

寿司屋ではサビ抜きでいつも頼んでいる。

・両親は海外にて仕事をしているので1人暮らし中。

☆使用楽器

ギター：ホライゾン

春原陽一（すのはらよういち）

性別：男
誕生日：２月１７日（水瓶座）
身長：１６７ｃｍ
得意教科：保健体育
苦手教科：保健体育以外の全て
趣味：読書・ゲーム・サッカー
特技：サッカー
外見：クラナドの春原陽平
性格：陽気な性格であり友達思いで、家族思い。

・サッカー部の先輩が、同級生をいじめている現場を発見し、
それを助けるが、暴力を使ったため退部した。
このため運動神経だけは優れている。
・不良として悪名が立っているが事を荒立てることを嫌うので、
周囲からは「ヘタレ」のレッテルを貼られ、
不用意な言動が原因で他者から痛い目に遭わされたり、
いらぬ誤解をされることが多い。
しかし心身とも丈夫で立ち直りは早い。
・智也と明久とは幼稚園からの付き合い。
・元々黒の頭髪を染髪して金髪にしている。
鉄人によく注意されているが本人は直す気は無い。
・妹の芽衣に対しては普段邪険に扱っているが、大切に思っている。家族思い。
・異性に対する興味が旺盛で、魅力的な女子を見つけてはすぐナンパしたがる。
しかし成功した試しは今だなし。
・勉強は苦手だが、関心事に対する集中力には目を見張るところがある。

キャラ紹介（1）（後書き）

皆さんの感想お待ちしています。

入学式の朝

桜の季節の４月某日。
中学の制服の学ランとは違い、ブレザーを着た俺がそこに映っていた。
俺は鏡の前で自分の姿を確認する。
智也「…よしっ」

まだ着慣れない高校の制服だが、まぁ其の内慣れるだろう。

智也「…しかし相変わらずの面だな…」

俺は顔にコンプレックスを抱えている。
顔というよりは『目』だな。俺は『ツリ目』なのだ。
さらに小学校のときに怪我をして左眉のところに傷が少しある。
なのでヤンキーと間違えられていたりする。
最初の頃は髪を伸ばして傷を隠していたが
鬱陶しいのもあり、今では何もしていないが……

智也「そうだ。明久に電話してみるか。
　　なんとなくまだアイツ寝てそうだし」

俺は明久のことが気になり電話をかけてみる。

プルルルルル

ガチャ

明久「はぃ、もひもひ、吉井ですけど……」

智也「おはよう明久。今起きたみたいだな」

明久「ん？あれ？智也どうしたの？」

智也「いや、お前の事だから寝坊するんじゃないかと思ってな」

明久「え？って、えぇ！？もうこんな時間なの！？
智也ありがとう！電話もらってなきゃ寝坊するところだったよ」

智也「じゃあ、起きた事だし入学式の時ぐらいは遅刻するなよ。
……あとおそらくないと思うが間違っても姉の制服着てくるなよ」

明久「そんな間違いするわけ・・・・・・ナイジャナイカ」

智也「おい、今の間は何だ？しかも最後なんで棒読みなんだ？」

明久「えっと昨日準備していた制服が姉さんの制服だった・・・・・・」

智也「さっそくじゃないか！？
一応言っておくが俺達の制服はブレザーだからな」

明久「う、うん。ちゃんと確認してから着るよ」
智也「じゃあ、また学園でな。遅刻するなよ」
明久「うん。じゃあ、また学園で」
俺は電話をきる。
智也「さてっと、俺もそろそろ行くか。」
―今日は高校の入学式だ―
途中でコンビニに寄り、カフェオレとパンを買い、店を出ると…

タッタッタッタッ

智也「ん？」
足音か…？　音がする方に視線を向けると…
智也「平沢？」
視線の先には平沢がこちらに向かって走ってきていた。
そして俺に気付く事もなく通り過ぎて行った。
智也「どうしたんだあいつ？あんなに急いで」
時計でも見間違えて、遅刻だと思ったのか？まさかな。

・・・・・・明久や陽一みたいなヤツはそうそういないよな。

学校に近付くにつれ、段々と学生の数が増えていく。
歩いていると校門に着いた。
そして同時に見知った人物も見つけた。

その見知った人物『平沢』は、ぼーっと突っ立って校舎を眺めていた。
周りの上級生や新入生はそんな彼女を一瞥し、過ぎ去って行く。
あんな場所（校門のど真ん中）に立っていられたら
皆の邪魔になるので声を掛ける事にした。

智也「おはよう平沢」

唯「ん？　あっ！トモ君！！おはよう！！」

声掛けるとこちらを向き、途端笑顔になる平沢。

智也「校舎見上げて何してたんだ？」

唯「いやぁ？恥ずかしいんだけど時計、見間違えちゃって……」

智也「ん？どういう事だ？」

ま、まさか・・・・・・

唯「朝起きて時計みたときね、『遅刻だぁ！』って
思って急いで学校に向かったんだ」

智也「……」

唯「んで　学校に着いて時間確認したら、
『あれっ！？時間見間違えたぁ！？』って思って
ぼーっとしてたんだぁ。いやっ～お恥ずかしい」

そう言って頭をかく平沢。

（マジか…まさかあの２人と同じようなヤツがいるとは）

唯「どうしたの？トモ君？」

俺が黙ったままだったので、顔を覗き込んでそう尋ねる平沢。

智也「気にするな。ちょっと考え事をしてたんだ」

唯「そうなんだぁ」

智也「クラス分け、もう発表されてるんだろ？さっさと見に行こうぜ」

唯「うん！　そうだね♪」

俺は平沢と一緒にクラス分けを見に行こうとすると

？？？「唯？」

と誰かが平沢を呼ぶ声がした。

唯「あっ！和ちゃん♪」

『和ちゃん』と呼ばれた平沢よりも短い髪に眼鏡をかけた女子が俺達に向かって歩いて来た。

智也「知り合いか？」

唯「うん！そうだよ！友達なんだ」

和「珍しいわね。唯が私より先に学校に来るなんて」

唯「いや～はははは…ま、まぁねぇ～」

『時計を見間違えて早く来た』とは言えないよな。
平沢は冷や汗をかきながら曖昧に返事をしている。

和「ねぇ　唯、この人は？」

『和ちゃん』と言われる女性が俺の方を向き平沢に尋ねてきた。
そりゃ当然の疑問だよな。
友達の横に見知らぬ人物が居ればそういう質問になるよな。
しかも俺の見た目はヤンキーみたいだからな。

俺が自己紹介しようとすると

和「もしかして、あなたがトモ君？」

智也「えっ！？」

何で俺の事知ってんだ！？まさかエスパーか！？
しかもトモ君呼ばわり！？やめて！恥ずかしいから！！

唯「うん！そうだよ、この人がトモ君だよ」

智也「えぇっと和さんだっけ？なんで俺の事知ってるんだ？
それとトモ君はやめてくれ。かなり恥ずかしいから」

唯「あぁゴメンなさい。唯から聞いてね。
『新しい友達が出来たんだ』って」

智也（なるほどな、平沢から伝わったわけか。）

そう思い、平沢に視線を向けると…

唯「えへへ」

と嬉しそうな笑顔を浮かべていた。
そんな顔されるとこちらが照れるじゃないか

和「じゃあ自己紹介するわね。真鍋　和です　唯とは幼馴染みなの」

唯「私達ずっと一緒なんだよ」

幼馴染みか、俺と明久、陽一みたいなもんか。
……いや　あの陽一（バカ）と一緒にされたら可哀相だな。

智也「俺の事は平沢から聞いてると思うが…
中川智也だ。これからよろしくな」

和「ええ、こちらこそよろしくね」

入学式の朝（後書き）

和ちゃん登場です！

皆さんの感想お待ちしています

入学式の朝　～バカ登場～

俺達が互いに自己紹介を終えようとしたとき

陽一「そして俺が智也の親友の春原陽一！ヨロシク！！」

朝からテンションの高いバカが出現した。

唯・和「「わっ！！」」

急に出てきたバカに驚く平沢と真鍋。

コイツは必要な時には出てこず、全く必要ない時に出て来るな……

智也「お前どっから湧いて出てきた？」

陽一「ヒドいな。人を虫みたいにいうなんて傷つくじゃないか」

智也「いや、お前は虫じゃないだろ」

陽一「当たり前だ」

智也「お前と虫が一緒なんて虫が可哀想だろうが」

陽一「え！？ナニソレ。虫の心配！？俺虫以下なの！？」

智也「なに当たり前なこと言ってんだよ」

陽一「当たり前なのか！？アナタヒドイよ！！」

智也「デケェ声出すな、うるせェしウザいキモイいし」

陽一「そうさせたのアナタでしょうが！！
楽しいか！？こんなことして楽しいのか！？
ってキモいってなんだよ！！」

智也「非常に楽しい。お前をからかうことが俺の生きがいだ」

陽一「最悪だァ！！！コイツ！！！」

そう言って頭を抱える虫以下の生物。

……あぁ楽しいなぁ。

さてコイツをからかうのはこれくらいにするか、
合格発表のとき同様、周囲からの視線が痛いし……

それに……

唯・和「「……」」

平沢と真鍋がポカンと口を開けていた。

和「……えーっとその人は？」

と真鍋から質問が来た。

智也「コイツは一応俺の……友達なのかな？いや、悪友か？」

陽一「一応ってなんだよ。しかも何故、疑問系だ…しかも悪友ってなんだよ」

未だに頭を抱えている陽一が先ほどとは真逆のテンションで呟くように俺に言ってきた。

智也「そっちのほうが面白いからな」

陽一「アナタ、本当に最低ですよね」

智也（大丈夫。こんなことするのはお前だけだから）

あえて口にはしないが……

明久「智也！陽一！おはよう！」

そこで明久も合流した。

智也「おはよう俺の親友の明久」

陽一「って明久は親友で僕は悪友なのかよ」

智也「当たり前だろ」

陽一「コイツ本当に最低だ！！」

明久「ねぇ智也？この人たちは？」

智也「あぁ1人は明久も見たことあると思うが、

合格発表の日、一緒に見た平沢で、こちらは平沢の幼馴染の

真鍋だ」

明久「あ、初めまして吉井明久です。よろしくね」

唯「あっ私は平沢唯だよ」

和「真鍋和です」

明久とついでに陽一に自己紹介をする2人。
すると頭を抱えていた修司は立ち上がり。

陽一「春原陽一です！智也とは親友やってます！」

満面の笑みで本日二度目の自己紹介という快挙を成し遂げた。

唯「うん！よろしくね明久君、陽一君！」

和「よろしく」

陽一「ヨロシク！唯ちゃん、和ちゃん」

明久「よろしくね平沢さん、真鍋さん」

さっきはあんなにヘコんでたというのにすぐさま元のテンションに戻る。
……切り替え早ェな
しかも陽一はいきなり名前で呼んでるし・・・・・

唯「明久君と陽一君は、トモ君とはいつからの付き合いなの？」

おい、陽一のまえで『トモ君』って呼ぶなよ…
絶対このバカにからかわれる。

明久「僕と智也と陽一は幼稚園からの幼馴染みなんだよ」

陽一「そうなんだよね」

唯「へ？そうなんだ。私と和ちゃんも幼馴染みなんだよ」

陽一「そうなんだ？」

智也（あれ？　気付いてない？）

呑気に平沢と会話をする陽一。
コイツがバカでアホで良かった…

唯「そういえばトモ君と一緒にクラス分け見に行くんだった。
せっかくだし皆で行こうよ」

智也「そうだな」

陽一「トモ君？」

げぇ！？気づいた！？

唯「うんっ『智也君』だから『トモ君』」

陽一「トモ君……トモ君……クッ……クックッ……
……アッハッハハハハハハハ！！！
何？お前、唯ちゃんから『トモ君』って……ハッハッ！！

……って呼ばれてんの！？
アッハッハハハハハハハ！！！！」
腹を抱えながら俺に指をさし、大笑いする陽一。
唯「？」
平沢は状況が分かってない様子。
智也「……」
そして黙ったままの俺。
明久「陽一、そろそろ笑うのやめないと僕知らないよ」
陽一「アッハッハハハハハハ！！！！
ヤベぇ笑いすぎて腹イテェ」

そろそろ黙らせるか……

グッ

体の重心を少し落とし…
そして左足を軸足にし、右足を振りぬく！
智也「消し飛べ！！！！」
ドゴォン！！

陽一「あぶらッ！！！」

陽一の腹に蹴りをいれる。

３メートル近く吹っ飛びピクリとも動かなくなる陽一。

唯「えっ！？」

絶叫する平沢と

和「やり過ぎなんじゃないの？」

あくまで冷静な真鍋。

明久「だから言ったのに」

智也「大丈夫だろアイツなら。

……ほらいい加減クラス分け見に行こうぜ」

和「そうね…行くわよ、唯」

吹っ飛んだ陽一の方を眺めている平沢に声をかける真鍋。

『そうね』ってなかなかいい性格してるな、真鍋は…

唯「えっ！？陽一君はどうするの！？」

智也「１人になりたいんだって」

唯「う、うん…そうなんだ」

陽一をそのまま放置し、俺達はようやく、学校内へと歩き出した。

クラス分けの結果は

平沢と真鍋とも同じクラスになった。

……ついでに陽一のヤツとも同じだが……。

明久とは別のクラスになってしまった。

１―Ａ

春原陽一・中川智也・平沢唯・真鍋和

１―Ｃ

秋山澪・木下優子・霧島翔子・琴吹紬・田井中律・姫路瑞希

１―Ｄ

木下秀吉・坂本雄二・島田美波・土屋康太・吉井明久

という風になった。（あいうえお順にて記載）

初日は簡単な自己紹介で終わった。

入学式の朝　～バカ登場～（後書き）

最後にバカテスメンバーとけいおん！の
メンバーの1年次のクラス分けをしてみました。
愛子は転校してくるのでいません。

皆さんの感想お待ちしています

雄二たちとの出会い（1）

～1－Aの教室・放課後～

入学して2週間が過ぎた。部活はまだ検討中・・・・・・。

そんな事を考えていると真鍋たちの話し声が聞こえた。

和「唯、まだ部活に入ってないの？」

唯「何かしなくちゃいけないとは思ってるんだけど・・・。」

和「はぁ・・・こうやってニートが出来上がっていくのね・・・。」

智也「・・・さすがにオーバーじゃないか？」

ってかもしそうなら俺もニートの一員ではないのか？

唯「トモ君は部活決めたの？」

智也「俺もまだ決めてない」

和「……アナタもなの？」

何その視線は・・・そんな目で俺を見ないでくれ

智也「でもまぁバスケ部にでも入ろうかなとは思ってるがな」

和「バスケ部に？」

智也「そう。だけどここってそこまでバスケ強くないから迷ってるんだよ」

和「確かにここのバスケ部が強いなんて聞かないわね」

智也「だろ。だからまだ検討中なんだ」

俺は話をきりあげると帰り支度を済ませる。
陽一のバカはどこかに行ってるから明久と帰るかな。

～1－Dの教室・放課後～

雄二「やれやれ……やってもいないことに文句ばかり抜かしやがって」

雄二は中学の頃は悪鬼羅刹と呼ばれていて少し性格が悪い。

雄二は廊下を独りぐちる。
そして1人で帰り支度をすませていると、

雄二「っと、と・・・・・・」

誰かの机にぶつかり中に入っていた教科書が落ちてしまった。

雄二「この時期からもうこのザマとは勉強熱心なヤツだな」

とりあえず雄二は落としてしまった教科書を拾おうと手を伸ばす。
そしてその惨状に気がついた。

雄二「・・・これは酷いものだな・・・・・・」

そこには表紙は破れ、ページはぐちゃぐちゃになっていた。
新品で受け取ったばかりなので普通に使用していればまずはこうならない。

雄二はその教科書を拾い裏表紙を見ると
そこには『島田美波』と名前が書かれているのがわかった。
彼女はドイツからの帰国子女でまだ日本語が上手く言えないみたいだった。

雄二「そういえばあいつ、初日にクラスの連中を『ブタ』呼ばわりしてたっけ」

おそろく本人は意味をよく理解せずに言ったのだろうが、
それに腹立てた連中がやったんだろうな・・・

雄二「・・・・・・まぁいいか。俺には関係のない事だ」

雄二はそれをしばらく観察してから、机の中に戻そうとする。

その時だった

雄二「っ！？」

目の端に高速で動く何かが映った。
頭が判断する前に体が勝手に反応し、その場から大きく飛びのく。
間一髪で回避が間に合い、目の前の誰かの拳が通過する。
この時点でようやく、誰かが俺に殴りかかってきた、ということを理解した。
雄二は体勢を立て直し、拳の主を見る。

そこには

明久「・・・・・・・・・・・・」

雄二とは入学初日から因縁のある人物だった。

雄二「どういうつもりだ、テメェ」

雄二は静かに明久に問いかける。
2人は互いを快く思っていなかった。
雄二は明久のバカさ加減が気に入らず、
明久は入学式の時、雄二がある女性に話しかけられても無視し続けたので、
理由を聞こうとして、入学式初日から騒ぎを起こしたりしている。

明久「……なに……やってんだよ……」

雄二「それを聞きたいのはこっちのほう――」

明久「オマエ、その子の席で何やってるんだって聞いてるんだよ！」

いつものマヌケな姿からは想像つかないような怒鳴り声をあげる明久。

その視線は雄二の右手へと向いていた。
・・・・・・正しくは雄二の持ってるボロボロの教科書へと。
雄二の脳内では今の状況を整理していた。
雄二の右手のボロボロの教科書・無人の教室
校内に流れる雄二の風評・吉井の先ほどの台詞
それらから思い浮かぶ１つの結論。
雄二「・・・ま、まさか・・・・・・おい待て吉井。俺は」
明久「歯を食いしばりやがれこのクズ野郎っ！」
雄二「チッ、このバカ野郎が・・・・・・！
落ち着け！これは俺がやったわけじゃねぇ！」
明久「ブチ殺す！」
雄二「人の話を聞きやがれ！」
明久は完全に雄二の話を聞いてない。
雄二「なら、ちょっくら相手してやらぁ！」
と、雄二の言葉をかわきりに殴り合いが始まる。
明久「……絶対に……ぶっ飛ばす……！」
雄二「しつけぇな！まだやんのかよ！」

雄二は明久と殴りあいながら明久の事を考えていた。

雄二（なんでコイツは、諦めないんだ……？
俺とコイツじゃ、どっちが強いなんて一目瞭然だろ）

雄二の思っている通り、雄二に比べ明久のほうが傷が多かった。

雄二「いい加減にしろ、クソバカ野郎が！」

雄二は明久と戦いながら小学校の頃の苦い思い出が蘇る。

明久「……可哀想……じゃんかよ……」

雄二「あァ！？」

雄二は一瞬何を言ってるのかわからず聞き返す。

明久「可哀想だと思わないのかよ！あの子は日本に来て
知り合いがいなくて、言葉がわからないのに、
それでも1人で頑張っているんだぞ！
どうしてそんな頑張っている子を虐めるんだよ！」

ボロボロのはずの明久は、力の籠もった声でそう言った。

雄二はそんな明久を見て前にも同じような状況を見ている気がした。

――いや、違うか。俺はコイツと違って逃げようと考えた。

雄二は我が身が大事だった。

だが、明久は――

明久「オマエみたいなヤツ許せるもんか！」

ガツン！　と一際大きな音が響いた。

明久は先ほどと比較にならないほどの勢いで吹き飛んだ。

そして雄二も明久の攻撃を食らい視界が揺らぐ

雄二「吉井！そんなに俺が気に入らないのならかかってきやがれ！
２度と立てないくらい殴ってやらぁ！」

明久「言われるまでもない！オマエをぶっ飛ばして後悔させてやる！」

雄二「ごちゃごちゃうるせぇんだよ！この雑魚が！」

そしてお互いの拳が届く距離まで駆け寄ったところで

智也「そこまでだ！」　康太「……そこまで」

明久・雄二「「っ！？」」

突如２人の前に人影が入ってきた。

雄二の前には智也が拳を受け止め、康太は明久の目の前にペン先を向けていた。

雄二「邪魔するな！テメェらには関係ないだろうが！」

康太「……それ以上暴れてもらっては困る」

智也「そうだ。コイツの言うとおりだ」

康太「……カメラが壊れる」

3人「「「……はぁ？」」」

康太の意味の分からない言葉に
雄二と明久だけではなく智也まで疑問符をあげる。
智也はてっきり2人の喧嘩を止める為に手伝ってくれたものかと思っていたのだ。

康太はそういうと教室のスミに行きゴソゴソと何かを取り出した。
……あれはＣＣＤカメラか？でもなんであんな所に？

智也「……まさか盗撮か？」

康太「・・・・・・・・・っ！（ブンブンブン）」

康太はすごい勢いで否定している。

雄二「……けっ。なんだか気が削がれちまった。命拾いしたな吉井」

雄二はそう言うと鞄を肩に担ぎ明久に背を向ける。

明久「待てよこの野郎！」

雄二「ぐがっ！」

明久は帰ろうとする雄二の肩を掴んで殴りつける。

智也「おい！明久落ち着けよ」

雄二「・・・・・・まだ続けたいようだな吉井」

再び一食触発の雰囲気にかわる。

智也「おい、お前らいい加減に――」

俺が2人をとめようとすると

???「キサマら、何をやっとるかっ！」

3人「「「っ！」」」

突如野太い声に阻まれた。

秀吉「どうじゃ？頭は冷えたかの？」

そこには女顔で爺言葉を使う同級生。木下秀吉がいた。

智也「今の声もしかしてオマエか？」

秀吉「どうじゃ？似ておったかの」

一時は秀吉に気をとられていると明久が雄二に殴りかかろうとしていた。

明久「離れて木下さんっ！くたばれ、この――」

雄二「けっ、ホントにしつこい野郎だ――」

智也「お互いいい加減にしとけよ」

ダン！！

俺は2人に前に出て2人の手を掴み床へと叩きつけた。

智也「さっきから言ってるよな。やめろって。ってかなんだこの状況は。
ここが騒がしいから覗いてみたら2人が殴り合ってるし」

明久「智也止めないで！僕はこの外道をブチのめさないといけないから」

雄二「けっ、できるもんならやってみやがれ」

智也「なんだ2人とも、まだやる気なのか？
それなら俺も本気でやらせてもらうが？」

秀吉「まったく・・・・・。理由は知らんが、
教室でコレ以上暴れられるのはワシもクラスメイトとして見逃せん。
事情を聞かせて貰えんじゃろうか」

明久・雄二「「フンっ！」」

智也「すまないな……えっと……」

秀吉「ワシは木下秀吉じゃ」

康太「……土屋康太」

智也「ああ、木下と土屋か。俺は中川智也だ。
こいつ等を止めるのを手伝ってくれてありがとう」

秀吉「よいのじゃ。クラスメイトじゃからのう」

康太「・・・・・・・・自分のためだ」

智也「で、何が原因なんだ？」

だが、２人は何も喋ろうとしなかった。

秀吉「やれやれ参ったのう」

智也「これじゃあサッパリわからないぞ」

康太「・・・・・・・（スッ）」

智也「ん？何だこれは」

康太「・・・・・・・・見るといい」

そんな中、康太はカメラをいじり動画を見せてくれた。

秀吉「・・・・・・・脚しか映っておらぬが？」

智也「・・・・・・・土屋。やっぱり盗撮を」

康太「・・・・・・（ブンブンブン）」

物凄い勢いで否定する康太。

２人も不満気であるが動画を見ることにした。

雄二たちとの出会い（2）

その後、動画を見ていくと放課後教室の掃除をしている時に
島田の教科書が落ちてしまい、掃除している人たちは
話に夢中で気づいていなく、気づいた頃にはすでにボロボロの状況
だった。

康太「・・・・・・これが真相」

康太が画面を操作して画面を消すと、

明久「ごごごごごごごごごめんなさいっ！」

明久が突然雄二に深々と頭を下げ謝りだした。

雄二「なんだ、いきなり」

明久「その、もう、なんてお詫びしていいか・・・・・・！
とにかく坂本君気がすむまで僕を殴って」

雄二「いや。もうお前を殴る場所ねぇし」

明久「あ、そっか。えっと、それなら――」

智也「どうしたんだ明久。突然？」

明久「あ、うん。実は――」

つまり明久は雄二が島田の教科書をボロボロししたと勘違いして

この惨状が出来上がったわけだ。

秀吉「しかし、坂本も坂本じゃな。きちんと説明したら良かったものを。
あの様子じゃと説明しておらぬようじゃのう」

雄二「・・・・・・ふん！」

秀吉「何か事情があったのかのう？」

雄二「お前には言ってもわからねぇよ木下。
んじゃ、用事が済んだから俺は帰るぞ」

明久「あ、うん。また明日、坂本君。それと、本当にゴメン」

雄二「けっ」

雄二は明久に背を向け再び鞄を肩に担ぐ。

明久「ねぇ智也、木下さん。新品の教科書って
どこに行けばもらえるか知ってる？」

智也「新品の教科書か・・・・・・」

秀吉「うん？いや、ワシは全然知らんが」

智也「明久。言っておくが秀吉は男だぞ」

明久「え？」

智也「いや、普通わかるだろ？」

秀吉「中川おぬしはワシが男じゃとわかるのか？」

智也「はぁ？当たり前だろ」

秀吉「よ、良かったのじゃ。
皆、ワシのこと女子じゃと勘違いしておってのう」

智也「大変なんだな木下も。それより教科書だ。土屋はわかるか？」

康太「・・・・・・（フルフル）」

明久「そっか～。購買には売ってないかな？」

智也「購買には売ってないかもな。
もしあったとしてもこの時間だともう閉まってるぞ」

明久「ならコピーして」

秀吉「何枚コピーするつもりじゃ・・・・・・」

康太「・・・・・・そもそもきちんとした教科書にならない」

明久「じゃあ、アイロンをかけるとか」

智也「服じゃないんだから無理だろ」

明久「僕の教科書と入れ替えるとか」

秀吉「配布された日に全員名前を書いたじゃろうが。
お主の名前が残っておっては入れ変えられんぞ」

康太「・・・・・・・根本的に解決していない」

明久「連帯責任で皆の教科書もボロボロにする」

秀吉「確かに島田の教科書は目立たなくなるかもしれんが・・・・・・」

智也「迷惑だろ」

明久「じゃあじゃあ」

雄二「あーもうっ！頭悪いなテメェラは！
んなもん教師に説明すればいいだろうが」

明久「あ、そっか。悪い事してるわけじゃないもんね」

秀吉「そういえばそうじゃな。坂本よ。よく教えてくれたのう」

康太「・・・・・・・盲点だった」

智也「さすが坂本。優しいな（ニヤニヤ）」

雄二（コイツ最初から気づいてやがったな）

明久「あ、坂本君ありがとう。助かったよ」

雄二「・・・・・・」

坂本が教室から出ようと扉に手をかけると

西村「待て、坂本。ここで何をしている」

皆「「「「「っ！？」」」」」

明久「筋肉教師・・・・・」

西村「西村先生と呼ぶ」

やばいな。今の状況は。

今の教室の状況に明久と雄二の傷跡がある。言い逃れはできない。

明久「先生すみませんっ」

西村「むぉっ！？」

そこで明久が上着を脱いで筋肉教師の顔にかぶせる

康太「・・・・・・失礼」

さらに康太がどこからか取り出したケーブルを上着の上から巻きつけ簡単に取れないようにする。

秀吉「今のうちにこっちからにげるのじゃ！」

木下が窓を開けそういう。

が、それは嘘だ。明久たちは扉から脱出し、身を隠す。

俺は囮役をかい、窓から地上に着地し、逃げる。

西村「待て、貴様ら！逃がさんぞ」

筋肉教師はまんまと策にひっかかり俺を追いかける。
俺はそのまま筋肉教師から逃げつけたが、体力が持たずにつかまってしまった。

その後、結局明久たちも捕まったが教科書はなんとかなったみたいだ。

あの後教師が誤って新品の教科書を廃品回収にだしてしまったので、それを明久と雄二が回収車を追いかけなんとか追いついて教科書を手に入れたみたいだ。

その件もあり明久と雄二は仲が良くなり、名前で呼び合うようになった。
もちろん、協力してくれた秀吉や康太。俺とも仲が良くなり名前で呼び合う仲になった。

雄二たちとの出会い（2）（後書き）

今回は雄二たちを登場させました。

長文になったため、2話構成で描いています。

皆さんの感想お待ちしています。

軽音部って何かな？

～後日、Dクラス～

午前の休憩時間

雄二「おい、明久Bクラスのやつらが購買のパンをかけて
　バスケやらないかって言ってるがどうする？」

明久「パン！やるやる。今月は食費がヤバかったんだだから助かるよ」

雄二「ならメンバー集めるか」

康太「・・・・・・手伝う」

秀吉「ワシも参加させてもらおうかの。なにやら楽しそうじゃ」

明久「なら僕は智也に声掛けてくるよ」

雄二「ああ、今日の昼休みだからな」

～Aクラス～

俺は陽一と話をしていた。

智也「そういえば陽一は部活なにかするのか？」

陽一「ん？あー俺は帰宅部だね。いい女探しに行くからな」

智也（あー。コイツらしい理由だな）

陽一「そういうお前は？」

智也「まだ考え中だ。まぁそろそろ決めないとな」

陽一「まぁ智也は頭もいいし、運動も出来るし、音楽も出来るからな。
でもバスケでもするのか？」

智也「まぁやるなら自分の好きなことしたいからな」

俺と陽一が話していると明久がやってきた。

明久「ねぇ智也。今日の昼休み、Bクラスの人たちと
購買部のパンをかけてバスケしない？」

智也「ああ、いいな。乗った。雄二たちもやるんだろ」

明久「うん。あ、陽一もどう？」

陽一「もちろん。僕もやるよ」

明久「じゃあ今日の昼休み体育館だよ」

俺達が会話をしていると今度は平沢が話に入ってきた。

唯「ねぇトモ君、軽音部って何かな？」

智也・明久「「軽音部？」」

なんでいきなり軽音部なんだ？

唯「私ね、軽音部に入部したんだけど何するのかよく分かんないんだぁ」

智也「何するのか分からないのに入部するなよ
…てか軽音部っていったら…ギター弾いたり、ベース弾いたりして、
バンドとか組んだりするところだろ」

陽一「へぇ～」

唯「えっ　ギター…？　バンド…？」

そんな単語がでてくるとは思わなかったみたいな顔をする平沢。
そして陽一お前も知らなかったのか？

唯「えぇ！？そうなの！？私、軽い音楽って書くからてっきり
簡単なことしかとやらないと思ったのに…」

智也「簡単なことってなんだよ？」

唯「口笛とか…」

智也「なんだそのやる気のでない部活」

明久「そうだね」

唯「和ちゃんにも言われた…」

口笛をする部活ってなんだよ…かなりシュールだな。

和「じゃあ　何なら弾けるの？」

俺達の会話を聞いていた真鍋が平沢にそう聞いてきた。

唯「ん？……カ、カスタネット…」

和「…すごく似合うわ…」

智也「……同感」

陽一「カスタネットか凄いね唯ちゃんは」

明久「陽一・・・・・」

なんか1人変な事言ってるがスルーするか

キーン　コーン　カーン　コーン…

休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴る。

唯「どうしよう和ちゃん？…」

和「どうしようって言われても…」

智也「大変だな真鍋も……」

平沢は真鍋に泣き付いていた…

明久「じゃあ昼休みに」

智也「おう」

昼休みのバスケはもちろん俺達が勝っておごって貰った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4050z/

バカとけいおん！と召喚獣

2011年12月20日19時48分発行